

## (五) 寒水寺

神辺町西中条

寒水寺は山号を明尾山と称する真言宗大覚寺派の寺院である。訪ねるには堂々川沿いの道を登っていくと、その入口に「寒水寺」と記した石碑が立てられている。まさしく修業の場としての寺院であったことがわかる。神辺城址から見るとその麓は、遍照寺の真東の山中に位置していることがわかる。場所的には、湯野地区の北方、堂々川の西側であるが、住所は西中条である。



寒水寺入口石柱



案内板 藤森方面へ

### 一 寒水寺の縁起

福山市神辺歴史民俗資料館ホームページ

神辺の寺院より引用

標高百四十mの山中に位置し、寺伝によると養老二(七一八)年の草創といわれる古寺で当時は「清水寺(きよみずでら)」と呼ばれていました。昔は天台宗でしたが、弘法大師空海がこの地を巡錫(じゅんしゃく)僧が諸国を回って布教すること)した後、真言宗に改宗したといわれています。

寒水寺へ向かうためにあったと伝わる旧参道(現在より西の湯野村小山池付近からの参道Ⅱ消滅)の門跡には梅檀(せんだん)の古木があり、その樹下に地藏二体を半浮彫りにした巨岩がありますが、さらに登ると仰ぎ見るように地藏が彫られ、霊地に入る導きのようで、山岳寺院として四隣を圧していたことがうかがえます。

また、境内から幾度も古瓦が出土され、多数の子院があったことが想像できます。「西中条村誌」によると「七堂伽藍(がらん)を配し、十二子院があった」とされ、さらに古記録によれば「古来、湯野村二百貫を寺領としていたが、兵乱により破壊され、後に神辺城主・杉原氏が田畠一町二反を寄進したが、毛利元康によって没収された」と記されています。

神辺平野が一望できるこの場所は、昔から景勝地として有名で、漢詩人・菅茶山も弟子や仲間とたびたびここを訪れ、詩や和歌を詠んでいます。

写真にあるように藤森(小山池)方面から参道があるとのこと。現在も、中条小学校の児童たちが遠足で登り、茶山詩を朗読するとの事である。一度この参道を登られたでしょうか。

【ちよつと休憩】 「福山志料」には寒水寺の記述がない

今まで取り上げた寺院については、「福山志料」の中で茶山はどのように記述しているのか紹介した。しかし、寒水寺の記述は見当たらない。よく考えてみると当然であった。茶山が生きた時代、中条地域は福山藩阿部家の所領ではなかったのである。

水野家が改易になった後、岡山藩による検地で一五万石とされ、松平家が入府した時、五万石が削られ天領になっている。その際、中条地域は天領となっている。道上亀山神社の北東にある池のそばに「番所跡」の石碑があることからわかる。再び福山藩の領地になるには阿部正弘の時代にまで待たなければならない。

二 茶山と寒水寺

上寒水寺路上

黄葉夕陽村舎詩 前編 卷一

寺見飛禽外 寺は見ゆ飛禽（ひきん）の外  
 泉鳴雜樹中 泉は鳴る雜樹（ざつじゆ）の中  
 狂痴從世棄 狂痴（きょうち） 世を棄（す）つるの從（まか）せ  
 尊酒有人同 尊酒（そんしゆ） 人と同（とも）にする有り  
 尋徑追牛跡 徑（けい）を尋ねて 牛跡（ぎゆうせき）を追ひ  
 班荊待午風 荊（けい）を班（わか）つて 午風（ごふう）を待つ  
 雲松隨處在 雲松（うんしょう） 隨処（ずいしょ）に在り  
 吾道幾時窮 吾が道 幾時（いくとき）か窮（きわ）まらん

飛禽 飛んでいる鳥。 狂痴 常軌を逸すること、その人。 尊酒 たる酒 荊 いばら。  
 班 敷く、敷き広げる。 午 時刻では正午頃

（大意） 寒水寺は高いところを飛ぶ鳥の上の方にみえる。足の下の方では雑木の中で谷川の水音が聞こえる。常識外れの者（茶山をさす）は世の中から見捨てられていることにして、酒を飲むときは人が相手にしてくれる。牛が通ったような小徑をたどり、草を敷いて座り、午（ひる）の風を待っているといい風が吹いてきた。見渡せば雲のかかった松がいたる所にある。私の進む道は、いつになっても極まる事がないだろう。

（情景） この詩が詠まれた時期は不明だが、詩集前編ある。前編は茶山二七歳から三五歳までの詩が載せられている。すると、茶山が家業を弟恥庵に任せ学問で身をたてようとした時期ではないだろうか。世間から家業を継いでおればいいのに、塾を開いてやっつけていけるのかなどと陰口を言われた時期ではないか。  
 安永四年（一七七五）に私塾「金栗園」を開いているが、まだ見通しがたっていないのか、茶山は自ら「狂痴」と言っているのはこのような状況下にあったからではないかと考えられる。

次の詩は寛政年間（一七八九〜一八〇〇）に作られたと言われる詩で時期は不明である。  
 黄葉夕陽村舎詩にも記載されていない。

九日与諸子上寒水山

菅茶山遺稿集

醉避斜暉下画巒

茶鐘支石坐臨湍

回頭世上皆塵土

如此重陽得亦難

三 茶山日記にみる記述

文化十三年（一八一六）	314	寒水寺恵氷菽・烟袋	（氷菽 高野豆腐？）
	5/12	使龜古代菅三詣寒水寺	
文化十四年（一八一七）	1216	使克二・兵三之寒水寺	香叶・順次・栄之介・左馬之助従
文政元年（一八一八）	1017	寒水寺先住來恵密茸	（密茸 松茸？）
文政五年（一八一八）	216	阪谷携數生 上寒水寺	夜至

参考文献

- 菅茶山略年表  
菅茶山 上・下  
福山志料  
神辺の寺院  
菅茶山とゆかりの人々  
菅茶山遺稿集  
黄葉夕陽村舎詩 復刻版
- 菅茶山記念館  
富士川英郎  
芸備郷土誌刊行会  
神辺歴史民俗資料館ホームページ  
菅茶山記念館  
柏崎順子著 大平文庫  
児島書店